

§ 2. ゼータ関数と無限級数

フーリエ級数解析から、様々な無限級数の公式を導いたけれど (P101)、
 その中で、次の 2 つに着目してみよう。

$$\frac{1}{1^2} + \frac{1}{2^2} + \frac{1}{3^2} + \frac{1}{4^2} + \dots = \frac{\pi^2}{6} \dots \textcircled{1} \quad \frac{1}{1^4} + \frac{1}{2^4} + \frac{1}{3^4} + \frac{1}{4^4} + \dots = \frac{\pi^4}{90} \dots \textcircled{2}$$

この①, ②は、実は次に示す“ゼータ関数” $\zeta(s)$ の 1 種と考えることができる。

$$\text{ゼータ関数 } \zeta(s) = \sum_{k=1}^{\infty} \frac{1}{k^s} = \frac{1}{1^s} + \frac{1}{2^s} + \frac{1}{3^s} + \frac{1}{4^s} + \dots \dots \dots (*1)$$

一般に、このゼータ関数 $\zeta(s)$ の独立変数 s は、複素数をとるんだけど、

①と②はその中で、 $s=2$ または、 4 のときの特殊な場合と考えることができるんだね。そして、このゼータ関数 $\zeta(s)$ は、次式で示すように、

素数 p (prime number) の式と密接に関係している。

↑

素数 p とは、1 と自分自身以外に約数をもたない自然数のことで、1 は除く。
 よって具体的には、 $p=2, 3, 5, 7, 11, 13, 17, 19, 23, 29, \dots$ のことである。
 そして、素数でない自然数は合成数 (composite number) という。一般に、
 すべての自然数は素数 p により一意 (1通り) に素因数分解できる。

$$\zeta(s) = \sum_{k=1}^{\infty} \frac{1}{k^s} = \prod_{p:\text{prime}} \frac{1}{1 - \frac{1}{p^s}} \dots \dots \dots (*2)$$

これだけでは、まだ何のことも全然分らないだろうね。これから解説しよう。

まず、(*2) の右辺の $\prod_{p:\text{prime}} \frac{1}{1 - \frac{1}{p^s}}$ は、考案者のオイラー (Leonhard

Euler) に因んで、“オイラー積”と呼ぶことにしよう。このオイラー積は、

すべての素数 p に渡って、 $\frac{1}{1 - \frac{1}{p^s}}$ の積をとったもので、次のような無限積

で表されるんだね。

$$\prod_{p:\text{prime}} \frac{1}{1 - \frac{1}{p^s}} = \frac{1}{1 - \frac{1}{2^s}} \times \frac{1}{1 - \frac{1}{3^s}} \times \frac{1}{1 - \frac{1}{5^s}} \times \frac{1}{1 - \frac{1}{7^s}} \times \dots \dots \dots \textcircled{3}$$

もちろん、オイラー積は、次のように表すこともできる。

$$\prod_{p:\text{prime}} \frac{p^s}{p^s-1} = \frac{2^s}{2^s-1} \times \frac{3^s}{3^s-1} \times \frac{5^s}{5^s-1} \times \frac{7^s}{7^s-1} \times \dots \dots \dots \textcircled{3}'$$

↑
分子・分母に p^s をかけた

ここで、話を①の無限級数に戻して、複素数 s が実数 $s=2$ のときについて考えてみよう。すると、 $(*2)$ と③から、このときのゼータ関数 $\zeta(2)$ は、

$$\zeta(2) = \sum_{k=1}^{\infty} \frac{1}{k^2} = \prod_{p:\text{prime}} \frac{1}{1-\frac{1}{p^2}} \dots \dots (*2)'$$

示すと、次のようになるんだね。

$$\zeta(2) = \frac{1}{1^2} + \frac{1}{2^2} + \frac{1}{3^2} + \frac{1}{4^2} + \frac{1}{5^2} + \dots = \frac{1}{1-\frac{1}{2^2}} \times \frac{1}{1-\frac{1}{3^2}} \times \frac{1}{1-\frac{1}{5^2}} \times \frac{1}{1-\frac{1}{7^2}} \times \dots \dots (*2)'$$

しかし、この等式 $(*2)'$ が本当に成り立つのか？疑問に思っているだろうね。

これから解説しよう。 $(*2)'$ の右辺の各項は、 $\frac{1}{1-\frac{1}{p^2}}$ (p :素数) の形を

しているけれど、 $\frac{1}{p^2} = r$ (公比) とおくと、これは、 $\frac{1}{1-r}$ となり、また、

$p \geq 2$ より、 $-1 < r = \frac{1}{p^2} < 1$ をみたら。つまりこれは、初項 1 、公比 r の無限等比級数 $1+r+r^2+r^3+\dots = \frac{1}{1-r}$ (収束条件： $-1 < r < 1$) の形をしていることが分かるでしょう。よって、 $(*2)'$ の右辺の各項を具体的な無限等比級数で表すと、

$$\frac{1}{1-\frac{1}{2^2}} = 1 + \frac{1}{2^2} + \left(\frac{1}{2^2}\right)^2 + \left(\frac{1}{2^2}\right)^3 + \dots, \quad \frac{1}{1-\frac{1}{3^2}} = 1 + \frac{1}{3^2} + \left(\frac{1}{3^2}\right)^2 + \left(\frac{1}{3^2}\right)^3 + \dots$$

$$\frac{1}{1-\frac{1}{5^2}} = 1 + \frac{1}{5^2} + \left(\frac{1}{5^2}\right)^2 + \left(\frac{1}{5^2}\right)^3 + \dots, \quad \frac{1}{1-\frac{1}{7^2}} = 1 + \frac{1}{7^2} + \left(\frac{1}{7^2}\right)^2 + \left(\frac{1}{7^2}\right)^3 + \dots$$

……となるんだね。よって、 $(*2)'$ の等式を具体的に示すと、

$$1 + \frac{1}{2^2} + \frac{1}{3^2} + \frac{1}{4^2} + \frac{1}{5^2} + \dots = \left\{ 1 + \frac{1}{2^2} + \left(\frac{1}{2^2}\right)^2 + \dots \right\} \times \left\{ 1 + \frac{1}{3^2} + \left(\frac{1}{3^2}\right)^2 + \dots \right\} \\ \times \left\{ 1 + \frac{1}{5^2} + \left(\frac{1}{5^2}\right)^2 + \dots \right\} \times \dots \dots \dots (*2)''$$

となる。しかし、これでもまだ、この等式が成り立つのか？確信できない方がほとんどだと思う。しかし、この(*2)''の右辺を実際に分配の法則を使って、次のように展開してみると、これが左辺の無限級数

$$1 + \frac{1}{2^2} + \frac{1}{3^2} + \frac{1}{4^2} + \frac{1}{5^2} + \dots \text{ を表していることが見えてくるはずだ。}$$

$$(*2)'' \text{ の右辺} = \left\{ 1 + \frac{1}{2^2} + \left(\frac{1}{2^2}\right)^2 + \dots \right\} \times \left\{ 1 + \frac{1}{3^2} + \left(\frac{1}{3^2}\right)^2 + \dots \right\} \times \left\{ 1 + \frac{1}{5^2} + \left(\frac{1}{5^2}\right)^2 + \dots \right\} \times \dots$$

① $1 \times 1 \times 1 \times \dots = 1$
 ② $\frac{1}{2^2} \times 1 \times 1 \times \dots = \frac{1}{2^2}$
 ③ $1 \times \frac{1}{3^2} \times 1 \times \dots = \frac{1}{3^2}$
 ④ $\left(\frac{1}{2^2}\right)^2 \times 1 \times 1 \times \dots = \frac{1}{4^2}$

①では、 $1 \times 1 \times 1 \times 1 \times \dots = 1$,

②では、 $\frac{1}{2^2} \times 1 \times 1 \times 1 \times \dots = \frac{1}{2^2}$

③では、 $1 \times \frac{1}{3^2} \times 1 \times 1 \times \dots = \frac{1}{3^2}$,

④では、 $\left(\frac{1}{2^2}\right)^2 \times 1 \times 1 \times 1 \times \dots = \frac{1}{4^2}$

さらに、⑤ $\frac{1}{5^2}$, ⑥ $\frac{1}{6^2}$, ⑦ $\frac{1}{7^2}$, ⑧ $\frac{1}{8^2}$ まで示しておくとして、

⑤では、 $1 \times 1 \times \frac{1}{5^2} \times 1 \times \dots = \frac{1}{5^2}$, ⑥では、 $\frac{1}{2^2} \times \frac{1}{3^2} \times 1 \times 1 \times \dots = \frac{1}{6^2}$

⑦では、 $1 \times 1 \times 1 \times \frac{1}{7^2} \times \dots = \frac{1}{7^2}$, ⑧では、 $\left(\frac{1}{2^2}\right)^3 \times 1 \times 1 \times 1 \times \dots = \frac{1}{8^2} \dots$

以降、重複することなく、欠落することなく、(*2)''の右辺を展開することにより、これが(*2)''の左辺の無限級数 $\frac{1}{1^2} + \frac{1}{2^2} + \frac{1}{3^2} + \frac{1}{4^2} + \frac{1}{5^2} + \dots$ を表していけることが、ご理解頂けると思う。

よって、

$$\zeta(2) = \sum_{k=1}^{\infty} \frac{1}{k^2} = \prod_{p:\text{prime}} \frac{1}{1 - \frac{1}{p^2}} \dots\dots (*2)'$$

$\frac{\pi^2}{6}$ (①より)

$\prod_{p:\text{prime}} \frac{p^2}{p^2-1}$

$$\frac{1}{1^2} + \frac{1}{2^2} + \frac{1}{3^2} + \frac{1}{4^2} + \dots = \frac{\pi^2}{6} \dots\dots ①$$

$$\frac{1}{1^4} + \frac{1}{2^4} + \frac{1}{3^4} + \frac{1}{4^4} + \dots = \frac{\pi^4}{90} \dots\dots ②$$

が成り立つことが分かった。ここで、①の結果より、(*2)'は、

$$\frac{2^2}{2^2-1} \times \frac{3^2}{3^2-1} \times \frac{5^2}{5^2-1} \times \frac{7^2}{7^2-1} \times \dots = \frac{\pi^2}{6}$$

オイラー積 (素数から構成される無限積)

無理数

導けるんだね。すなわち、素数から構成される無限積 (オイラー積) が、簡単な無理数 $\frac{\pi^2}{6}$ と一致するという事なんだね。面白かったですよね？

同様に、 $s=4$ のときも考察すると、

$$\zeta(4) = \sum_{k=1}^{\infty} \frac{1}{k^4} = \prod_{p:\text{prime}} \frac{1}{1 - \frac{1}{p^4}} \dots\dots (*2)'''$$

$\frac{\pi^4}{90}$ (②より)

$\prod_{p:\text{prime}} \frac{p^4}{p^4-1}$

$$\frac{2^4}{2^4-1} \times \frac{3^4}{3^4-1} \times \frac{5^4}{5^4-1} \times \frac{7^4}{7^4-1} \times \dots = \frac{\pi^4}{90}$$

も導けるんだね。

一般に、複素数 s の関数であるゼータ関数 $\zeta(s)$ は、 $\mathbf{Re}(s) > 1$ でしか定義

s の実部

できない。これを $\mathbf{Re}(s) < 1$ でも定義するために、この $\zeta(s)$ を解析接続したものを利用すると、有名な“リーマン予想”とも関わってくるんだね。このように、フーリエ解析から導かれた無限級数の公式から、様々な数学上の重要テーマが導かれていくことが分かって頂けたと思う。